

タイトル ポンポコポコリンだいぼうけん

【第1場面】

あるところに、海と山に囲まれたのどかな村がありました。
そこにタヌキの家族が住んでいて、双子の子ダヌキがおりました。
男の子のポンポコは、釣りが得意で食いしん坊。
女の子のポコリンは、物知りで、おしゃべりが大好き。
2匹は家の畑仕事を手伝いながら、休みのときは野山をかけまわったり、海で魚を捕ったりして、毎日楽しく暮らしておりました。

【第2場面】

ある日、ポンポコ・ポコリンは旅ネズミに出会いました。
旅ネズミ：「やい、お前たち。東の方にでっかい町があるのを知ってるか？」
旅ネズミに聞かれて、2匹が「知らん」と答えると、旅ネズミはチッチッチとカッコつけて、
旅ネズミ：「ここからずーっと東に行くと、でっかい町がある。
そこは毎日がお祭りみたいに賑やかで、こんな田舎じゃ見たことも聞いたこともないようなお宝でいっぱいさ。それにな。夜も昼みたい明るくて、それはそれは美しいんだぜえ〜」
とまくし立て、
旅ネズミ：「まあ、お前達みたいなハナタレダヌキが東の町に行くことは一生ないだろうけどよ。さあて、新しい旅がオレ様を呼んでるぜ！じゃ、あばよ」
とバカにして行ってしまったので、さあ大変。

【第3場面】

2匹は居ても立ってもいられなくなって、走って家に帰ると父さんタヌキと母さんタヌキに
ポンポコ：「父ちゃん、母ちゃん、おいらたち東のでっかい町に行ってくる！！」
父さんタヌキは驚いて、
父タヌキ：「何をダラズげなことを。お前達はまだ子供だ。東の町へなど危なくて行かせられん」
と言って止めたけれども、子ダヌキ達は諦めません。
ポコリン：「バカにされっぱなしじゃいられない！私たち2匹で力合わせて、東の町で一番の宝物を持って帰ってみせるから」
あんまり2匹が粘るもので、親タヌキはとうとう折れて、
父タヌキ：「それほど言うなら行ってこい。世の中を知るいい機会かもしれん」
子供達を送り出すことにしました。

【第4場面】

さあ、旅に出た双子の子ダヌキ、ポンポコ・ポコリン。

東を目指し海沿いの道を進んでゆくと、最初の町に着きました。

ポンポコ：「ふう、ちょっと休もう。喉が渴いちゃった」

と言って周りを見ると、小さな店があり、その横に水道がありました。ポコリン：「ちょっとお水を分けてもらおうよ」

2匹が水を汲もうとすると、

【第5場面】

キツネ夫人：「ちょいとお待ち！水泥棒は許さないよーー！！！」

キツネの奥さんが箒を振り上げ飛び出してきました。

ポンポコ：「うわー！助けてーー！」

キツネ夫人：「この泥棒ダヌキめ！」

箒が振り下ろされようとしたその瞬間、

キツネ主人：「おーっと、待った待った！」

キツネの主人が止めに入りました。

【第6場面】

キツネ主人：「その格好、お前さん達ここの子じゃないね？」

キツネの主人がたずねました。

ポンポコ：「おいら達は西の村から来たんだ。東の大きな町へ旅してるんだ」

ポコリン：「おじさん、水泥棒ってどういうこと？」

キツネ主人：「この町じゃ水は何よりも大切なのさ。なにせ海ばかりで山がないからね」

ポコリン：「水なら海にこーーーんなにあるじゃないの?!」

キツネ主人：「はっはっは、知らないのかい。良い水は山が作るんだよ。山に降った雨が木や土に磨かれて良い水になるのさ。良い山があると、良い水が出る。良い水が出ると、米も野菜も美味しく育つんだ」

ポンポコ：「そうか、おいら達の村には山があるから水に困らないんだな」

ポコリン：「それにお米も野菜もみんな美味しいわ。山のおかげだったのね」

子ダヌキ達が水の代金を払おうとすると、心優しいキツネの主人は、

キツネ主人：「長旅するのにお金がなくちゃ困るだろう」

と大事な水をタダで分けてくれました。

ポンポコ：「ありがとうございます！」

2匹は頭を下げました。そしてキツネの夫婦に別れを告げ、海辺の町を出発しました。

【第7場面】

ポンポコ・ポコリンが次にやってきたのは、険しい山の中の町。

看板には「ウミナシ町」と書いてあります。

ぐううううう

山道を歩いてすっかりお腹をすかせた2匹。そろそろ食事にしようと思っていると、ポコリン：「見て！こんなところにお寿司屋さんがあるよ！『回転クマ寿司』だって」

ポンポコ：「やった！おいら1日1回は魚食べないと力が出てこないんだ」

2匹は大喜びで店へ入って行きました。

【第8場面】

カウンターに座って、お寿司を待ち構えていると、

ウイーン カタカタカタ・・・「玉子寿司」

その次は「かつぱ巻き」

続いて「しんこ巻き」

それから「納豆巻き」

ポンポコ：「さっきからお魚のお寿司がひとつもない！」

ポンポコが叫ぶと、

【第9場面】

クマ店長：「いやあ～～、気付きましたか、お客さん」

後ろから寿司屋のクマ店長がヌッと現れました。

クマ店長：「ここウミナシ町は名前のとおり海がないもので、新鮮な魚が手に入らないのです」

ポンポコ：「そんなあ。おいら、魚が食べたかったなあ」

ポンポコはしょんぼり。

ポコリン：「仕方ないでしょ。文句いっちゃいけないわ。」

ポンポコ：「うへえ、ポコリンってばまるで母ちゃんみたいだ」

クマ店長は2匹から旅の話を聞くと羨ましげに

クマ店長：「私は生まれも育ちもこの山の中、海を見たことがないのです。一度でいいから、本物の海を見てみたいなあ。」

ポンポコ：「それなら、おいら達の村においでよ！おいらが釣りを教えてあげるよ。どんな魚も釣り放題さ

クマ店長：「それは素晴らしい。きっと行きます」

ポンポコ：「うん、約束だよ」

2匹はクマ店長と指切りすると、食事代を払い、ウミナシ町を出発しました。

【第10場面】

ポンポコ・ポコリンが次にやって来たのは、海も山もない真っ平らな町。

「嵐の通り道、注意」と書かれた看板に「なんだこりゃ？」2匹が首を傾げていると、

ドドド・・・ドドドド・・・

遠くの方から何やら聞こえてきました。

ポンポコ：「おや？なんの音だろう？」

ポコリン：「太鼓かな？」

ドドドド・・・ゴゴゴゴ・・・

だんだん音は大きくなります。

風はビュービュー吹き始め、真っ黒な雲がムクムク広がり空を覆い始めたかと思うと、

【第11場面】

ゴーーーーーッ！！

猛烈な風に巻き込まれ、空高く飛ばされてしまいました。

ポンポコ：「ひええ～～～」

小さな木の葉のように舞い上がった2匹、このままではバラバラに飛ばされてしまいます。

ポンポコ：「助けて～～～かあちゃーん」

ポコポンが叫んだその時、

オオワシ：「待ってろ、今助けるぞ」

勇ましい声が出て、何かがガシッと2匹を掴まえました。恐る恐る目を開けてみると・・・

【第12場面】

なんと巨大なワシでした。

ポンポコ：「助けてくれてありがとう」

オオワシ：「いいってことよ。ここはいい町なんだが、今の季節は嵐が酷くてな。山があれば嵐から守ってくれるだろうに」

ポコリン：「山が守るってどういうこと？」

【第13場面】

オオワシ：「嵐は山が嫌いなのさ。大きな山は壁になって嵐を弾き返しちまう、守り神なんだぜ」

ポコリン：「あんな嵐はじめて」

ポコリンはまだ震えています。

ポンポコ：「おいら達の村には滅多に嵐が来ないんだ」

オオワシ：「ほう、お前さん達の村には立派な守り神がついてるんだな。きっと良い村なんだろう。どうだい、送って行ってやろうか？」

ポンポコ：「ありがとう。でも、おいら達東の大きな町へ行きたいんだ」
オオワシ：「わかった、東の町へ送ってやろう。しっかりつかまってな」
ワシは大きく翼を広げると、スーッと滑るように空を飛んでゆきました。

【第14場面】

とうとう東の大きな町へ着いたポンポコ・ポコリン。
門をくぐると、そこはまるで別世界。
大きな建物がいくつもそびえ立ち、賑やかな音と鮮やかな光にあふれ、大勢の動物達が右へ左へ行き交っています。旅ネズミの話したとおり祭りのような賑わいです。
ポンポコ：「うわあ～～・・・・・・・・まるで夢の国だ」
2匹は口をポカンと開けてしばし立ち尽くしていましたが、ハッと気を取り直し、ポンポコ：「ようし、この町で一番のお宝を探すぞ」

【第15場面】

ポコリン：「お宝ってどんなものだと思う？」ポコリンが聞くと、ポンポコ：「そりゃあ一番でっかくて、一番光ってるものさ！」ポコリン：「それならあそこで探しましょう」
ポコリンが指差した先には、町一番の高い塔。
ポコリン：「あの塔なら広い町を見渡せるもの」
ポンポコ：「さっすがポコリン、頭が良いな！」
2匹は塔まで走って行くと、てっぺん目指して登り始めました。ヒーヒー フーフー あとちょっと
長い長い階段をやっとの思いで登りきり、顔を上げると……

【第16場面】

ポコリン：「うわあ、きれい」
町の灯りがキラキラと、光の海のように。
この世の宝物を全部集めてもかなわないくらい、眩しく輝いています。
ポコリン：「お星様とどっちが綺麗かな？」
ふと空を見上げると……星の姿が見当たりません。よく目を凝らせば、遠くかすかに見えそうだけ。
ポコリン：「町のあかりが強すぎて、お星様が輝けないんだわ」
がっかりするポコリン。
ポコリン：「村のお星様はとっても綺麗だったのに」

【第17場面】

2匹は村で見る星空を心に思い浮かべました。

夜空いっぱいには散りばめられた、金銀にきらめく星たち。山の陰から登る大きな満月。

月明かりに照らされて輝く海。

優しい波の音。

村の景色が次々と思い出され、胸がいっぱいになりました。

【第18場面】

ポンポコ：「おいら旅してわかったよ。美味しい水も米も魚も、守り神の山も、星いっぱいの空も、みんなおいら達の村の宝ものだったんだ」

ポコリン：「そうよ、私たちの村にも宝ものがいっぱいあるのよ」

ポンポコ：「なあポコリン、村へ帰ろう」

ポコリン：「うん、帰ろう」

2匹はしっかり手を繋ぎ、東の町をあとにしました。

【第19場面】

こうして、ポンポコ・ポコリンは再び野をこえ山こえ谷こえて、ふるさとの村へ帰ってゆきました。

父さんタヌキと母さんタヌキは大喜びして2匹をむかえました。

母タヌキ：「おかえり」

母さんタヌキは2匹をぎゅうっと抱きしめました。

ポンポコ：「ただいま！やっぱり、この村が大大だーい好き！」

2匹の笑顔はお日様みたいに輝いています。その笑顔を見て、父さんタヌキは言いました。

父タヌキ：「お前達、とびっきりの宝物を持って帰ったなあ」

それから、ポンポコ・ポコリンは、父さん母さんや村のみんなと一緒に仲良く、いつまでも幸せに暮らしましたとき。めでたし、めでたし。

(おしまい)